

あ い さ つ

金沢大学教育学部附属養護学校

校長 大塚 明 敏

私どもの学校のささやかな教育研究協議会のため、春まだ浅き北陸の地金沢に全国より熱心な同志の先生方お集まりくださり、誠に有難うございます。

いろいろなお立場、ご経験からのご意見やご指導をざっくばらんに頂戴できればと思います。

平成元年度の学校要覧によると、冒頭に本校教育の目標として「心身の発達に遅れや障害のある児童・生徒に対して、その実態に即した指導をおこなうことにより、一人ひとりの全面的な発達をうながし、その子らしく精一杯生きる力を育てることをめざす」ということがうたわれています。実は、それ自体を無意識のうちに現実認識として要約し、キャッチフレーズ化したものが、今年度をも含めて一昨年以来取り上げてきている「発達と障害に応じた指導」という研究全体のシャッポをなすテーマであります。先生たちそれぞれの具体的な日常の教育実践や研究活動自体が自然にそのような状況を創り出し、それを求めてきたということでありましょう。実際的にも小学部、中学部、高等部を併せもつ総合学園としての教育実践、研究活動を総括するにふさわしく、しかも時代的要請にマッチした統一研究テーマを用意するとなると至難の業で、その意味でも「発達と障害に応じた指導」というテーマを取り上げたのは要を得ていると見ています。金沢大学教育学部附属養護学校流のプラグマティズムがもたらした英知でありましょう。

さて、何のための「発達と障害に応じた指導」なりや？ これをどのように把握しておくかが重要な問題です。答は簡単にして明瞭、前に述べた本校の教育目標を額面通り実現することにあります。これを未来的展望に立つキー・コンセプトによってアウフヘーベンすると、心身の発達に遅れや障害のある児童・生徒のノーマリゼーションを目指すということになってきます。すなわち、ノーマリゼーションとしての教育を志向するということです。養護学校の教育自体にノーマリゼーションの概念を導入するのは日本的にも世界的にも新しい挑戦ですので、以下にその発想の要点を述べておきます。

ノーマリゼーションとは何か？ 元来の発想は、単に心身の発達に遅れや障害のある人々のみならず、病気の人、高齢者等をも含めた、いわゆる社会的弱者と呼ばれる人々すべてに対して可能なる限り普通の人々に近い生活を確保させるということにあります。これを心身の発達に遅れや障害のある人々を中心に普遍化すると、今住んでいる地域社会で他の一般の人々同様に普通の生活ができるように最大限の援助をし、一人ひとりの自己実現を保障し、クオリティライフ（質的に豊かな生活、日本国憲法流には健康で文化的な生活）

を充足させようとするようになってきます。このような対人処遇のフィロソフィー（哲学、指導理念、発想、考え方）が、ノーマリゼーションというものです。その実現を目指すには、次の二つの側面より相互補完的にアプローチしていくことが必要とされてきます。

一つの側面は、心身の発達に遅れや障害のある人々に対する社会の側の遇し方のノーマリゼーションです。これは、心身の発達に遅れや障害のある人々が自分の住んでいる地域で一般の人々同様に普通の生活ができるように社会の側が、社会の見識として、また社会システムとして保障をしていくことです。親せきづきあいや近所づきあい、学校外の青少年活動等に受け入れること、地域の小学校、中学校、高等学校、大学等と交流すること、卒業後の社会生活の場として作業所や職場を用意すること等は、その例でありましょう。日本の社会で今日「ノーマリゼーション」と騒がれているものは、どちらかと言えば、こういった領域の問題が中心となっているようです。しかしながら、これだけでは事実の反面のみしか照射していないと指摘しておきます。

それでは、残りの重要な半面をなすもう一つの側面は何か？ 心身に発達の遅れや障害のある人々自身のノーマリゼーションの徹底追求をはかる問題です。すなわち、児童・生徒が心身に発達の遅れや障害を有するものの、ひとりの人間としてはできるだけ正常に発達していけるよう周囲の人、なかんずく両親や教師が直接援助の手を差し伸べ、その子自身の自己実現や社会への統合をはかるべく精一杯努力を重ねていくことです。これが教育という仕事であり、人間形成としてのノーマリゼーションであり、ノーマリゼーションとしての教育というものです。この場合における正常な発達とは、社会一般の人々がつよような共通の文化、つまり、物の見方、考え方、感じ方、振舞い方、生活習慣、ことば、コミュニケーションのやり方等をその子なりに身につけることを意味しています。そのためにはできるだけ社会一般の人々の有する生活文化を学校の教育の内容として持ち込む必要があります。こういった仕事をするのが、実は、養護学校本来の使命であり、役割であります。同時に心身に発達の遅れや障害のある児童・生徒を有する両親が本音として求めていることも、そこにあると見てよいでありましょう。

この度の研究協議会において公開し、提言するような日常の様々な教育実践も、教科の学習、からだづくり、コミュニケーション、パソコン利用、性指導、読み聞かせ、卒業後の進路等をテーマとする多様なグループ研究活動も、すべてノーマリゼーションとしての教育に帰納され、統合されていくもので、また、そのためにこそ、それぞれの活動も必要とされてくるわけです。一つひとつの実践や研究は、単なる実践のための実践、研究のための研究としてタコツボ的に存在するのではなく、むしろ、一人ひとりの児童・生徒をトータル・オルガニズム（人間全体）としてマキシマム・グロースさせるためにこそ存在し、必要とされ、機能するものでなくては意味をなしません。このようなアプローチによってこそ、やがては、すべての道はローマへ通ずと化し、個別的な実践も研究も心身に発達の

遅れや障害のある児童・生徒自身のノーマリゼーションへと収斂され、グローバルながらも社会一般の文化を共有できるパーソナリティの育成へと連動していくことになるのです。ノーマリゼーションこそ、まさに21世紀へ向けての養護学校教育の指導理念として取り上げるべき仮説であり、ロマンではないでしょうか。無限の可能性を信じる教育です。

教育方法にしても、たとえ、心身に発達遅れや障害のある児童・生徒の教育であったとしても、まずは人間の子どもとしての成長発達に座標を置き、次に発達遅れや障害にどう対処していくかを工夫していくのが、この道の王道でありましょう。児童・生徒のもつ現実の障壁にのみ眼を奪われ、できない、できないとのみ騒いでいては質的に豊かで、変化に富んだ文化環境や経験など、とても用意することはできず、底無し沼にどこまでも吸いこまれていくのみです。如何に対象が心身に発達遅れや障害を有する児童・生徒であれ、これでは教育にならないことは言うまでもありません。こういった児童・生徒の教育については、大体において何ができないかよりも、何ができるかを出発点として探っていくほうがより生産的で賢明なやり方です。端的な例ですが、アウトプット（出力）学習よりもインプット（入力）学習に着目した時、用意できる学習内容や経験内容のレパートリーも広くなり、豊かとなるであります。概念形成や思想形成のハイラキー（階層性）としての学習や経験の構造、順序にしてもインプット・ファースト（入力先行）の原則に従って内容を提示していくことが肝要です。一般の子どものことばの発達において、話せるようになる前に話がわかるようになり、字が書けるようになる前に字が読めるようになるという自然の原理は、その典型的な例としてあげられます。

ともあれ、これまでのような干からび、ひび割れした近視眼的自立教育や、訓練、訓練によるマシン化教育はほどほどにして、これからはたとえ、ミリ刻みの進歩やグローバルな成長であったとしても血が通ったその子なり人間としての大成を目指す潤いのある多様な教育をこそ求めるべきであります。生活単元学習や作業単元学習を取り上げるにしても、これ一辺倒で心身に発達遅れや障害のある児童・生徒のノーマリゼーションを目指した教育を律するなど元来無理があり、偏っていると指摘しておきます。ノーマリゼーションを目指すには今より以上に質的に豊かな刺激や経験を用意する必要があり、そのためには更に多様な教育的アプローチが工夫され、用意されてしかるべきです。幸いに私どもの学校の場合には、まだスタートしたばかりとはいえ、自然のうちにこのような方向へ向って、今日進みつつあります。この度の教育研究協議会も見方によれば、その一端を披露するようなものかもしれません。教育方法の改善はもちろん必要ですが、それを背後から支える教育観なり、フィロソフィーについての新たな着想もまた要求されるころであります。何故ならば、立場は方法を決定するという影響力もあるからです。

養護学校教育の見果てぬ夢、はるかなるものは「ノーマリゼーション」にあり。